

ジレンマの時代 ~Poeの *The Black Cat* をめぐって

Living in Dilemma ~An Essay on *The Black Cat*

松田 稔

序 章

Edgar Allan Poeの*The Black Cat*は1843年に*United States Saturday Post*に発表され、後に1845年の*Tales* に収められている。*The Black Cat*のあらすじは以下ようになる。1人の男が、病的な心理から、愛する飼い猫Plutoの片目をえぐり、その後絞殺する。そして、次に飼い始めることになる不可解な1匹の黒猫の行為によって妻を殺し、巧みに隠したその死体も発覚にいたる。主人公の犯した罪に対する良心の悩み、恐怖を黒猫で象徴しているといえる。

しかし、この物語の中には、矛盾した点がある。それは妻殺しにかかわることだ。主人公は妻を殺すのだが、故意ではなく、あやまって殺してしまったと主張している。妻殺しの場面を少し詳しく説明すると、まず、主人公は飼っていた黒猫、これは2匹目の猫になるのだが、それに対し憎悪を抱く。ある日、ふとしたきっかけで逆上した彼は、持っていた斧でその猫を殺そうとしたとき、その斧は、とめようとして間に入った妻に振り下ろされ、妻は息絶えてしまう。

Uplifting an axe, and forgetting in my wrath the childish dread which had hitherto stayed my hand, I aimed a blow at the animal [the second black cat], which, of course, would have proved instantly fatal had it descended as I wished. But this blow was arrested by the hand of my wife. Goaded by the interference into a rage more than demoniacal, I withdraw my arm from her grasp and buried the axe in her brain. She fell dead upon the spot without a groan. (654)

このように、主人公は殺すつもりが無かった妻を殺してしまうのだ。このあとの主人公の行動には、ある矛盾点が見られる。妻を殺して死体を地下室の壁に埋めて隠した後、この惨劇の原因となった2匹目の猫を探そうとするのだが、その猫は姿を現さなかった。ところが、彼は安堵を感じてぐっすり眠ってしまうのである。

It is impossible to describe or to imagine the deep, the blissful sense of relief which the absence of the detested creature occasioned in my bosom. It did not make its appearance during the night; and thus for one night, at least, since its introduction into the house, I soundly and tranquilly slept; aye, slept even with the burden of murder upon my soul. (655)

何故主人公は殺すつもりが無かった妻を殺してしまったにもかかわらず、安堵を感じ、眠ってしまうのだろうか。さらに、殺そうとした黒猫を殺していないにもかかわらず、それを見つかるまで探すのをやめ、殺さなかったのだろうか。

第1章

妻殺しの発端となったのは、2匹目の猫を殺そうとしたことにあるといえる。それでは、主人公がこの猫を殺そうとした理由は何だろうか。彼は1匹目の猫であるPlutoを殺害した後、その代わりになる、似た猫を探し始める。

I went so far as to regret the loss of the animal [Pluto], and to look about me, among the vile haunts which I now habitually frequented, for another pet of the same species, and of somewhat similar appearance, with which to supply its [Pluto's] place. (651)

その後、Plutoによく似た猫を見つける。

It [the second black cat] was a black cat — a very large one — fully as large as Pluto, and closely resembling him in every respect but one. (652)

その猫はPlutoと同様に黒猫で大きさも同じくらいという特徴を持っていた。程なくして、彼はこの猫を飼い始めることになるが、間もなくこの猫に嫌悪を感じるようになる。そしてついには、その猫を殺そうとまでするのだ。主人公はなぜ、2匹目の猫に対してこのような嫌悪を抱くのだろうか。それには、この猫の特徴が関係してくる。

1つめはその猫が片目であるということ。

What added, no doubt, to my hatred of the beast, was the discovery, on the morning after I brought it [the second black cat] home, that, like Pluto, it also had been deprived of one of its eyes. (652)

もう1つは、Plutoとの相違点にある。2匹目の猫は、Plutoには無い特徴を持っていた。

Pluto had not a white hair upon any portion of his body; but this cat had a large, although indefinite splotch of white, covering nearly the whole region of the breast. (652)

その猫には胸に白い毛があったのだ。

その猫が片目であることと、胸に白い毛を生やしていること。これら2点が実は彼がPlutoに対して行ったことを思い起こさせるのである。それでは、彼はプルートーに対して何を行ったのだろうか。

主人公は結婚後、さまざまなペットを飼うことになる。その中に、Plutoと名づけた黒猫がいた。

Pluto — this was the cat's name — was my favorite pet and play mate. (649)

とあるように、主人公はPlutoを大変気に入っていた。彼とその猫の友情は数年にわたって続くのだが、その間、主人公の性格は一変してしまう。そして、妻とペットたちに対し暴力を振るうようにさえなっ

てしまうのだ。ある日、酔って帰宅した主人公は、Plutoに手を上げるのだが、噛み付かれてしまう。それに逆上した彼は、ナイフでPlutoの片目をえぐり取る。

I took from my waistcoat pocket a penknife, open it, grasped the poor beast by the throat, and deliberately cut one of its eyes from the socket! (649)

そしてその後、Plutoを殺害するに至る。

One morning, in the cold blood, I slipped a noose about its [Pluto's] neck and hung it to the limb of a tree.... (650)

このように、彼はPlutoの首に縄をかけ、木の枝に吊るして殺した。その夜、彼の家は火事になり、すっかり燃え尽きてしまう。その焼け跡に残った壁には、首に縄が巻きついた巨大な猫の姿が焼きついていたので。

I approached and saw, as if graven in bas-relief upon the white surface, the figure of gigantic cat. The impression was given with an accuracy truly marvelous. There was a rope about the animal's neck. (651)

ここで、2匹目の猫の特徴に話を戻そう。その猫が持っている特徴はこれらのことを主人公に思い起こさせるのだ。第1にPlutoの片目をえぐったこと、そして第2には2匹目の猫の胸にある白い毛にかかわるものであった。その胸の毛はあるものをかたどっていたのだ。

It was now the representation of an object that I shudder to name — and for this, above all, I loathed, and dreaded, and would have rid myself of the monster had I dared — it was now, I say, the image of a hideous — of a ghastly thing — of the GALLOWS! — oh, mournful and terrible engine of Horror and of Crime — of Agony and of Death! (653)

“Gallows”とあるように、2匹目の黒猫にある胸の白い毛は、絞首台をかたどっていたのだ。そしてこれはPlutoの首に縄をかけ、木の枝に吊るして殺したことを彼に思い起こさせたのである。それにしても、何故Plutoを殺したことを想起させたからといって、彼は2匹目の猫を殺そうとしたのだろうか。実は、その猫を殺そうとする他の理由が考えられるのである。

For my own part, I soon found a dislike to it [the second cat] arising within me. This was just the reverse of what I had anticipated; but — I know not how or why it was — its evident fondness for myself rather disgusted and annoyed me. (652)

と、主人公自身にも何故彼が2匹目の猫を嫌悪するのか、その理由がわからないのだ。このように考えると、冒頭から述べられている問題点、すなわち、なぜ主人公が嫌悪して殺そうとした猫を殺すまで追うのをやめたのか、そして、殺すつもりが無かった妻を殺してしまったにもかかわらず、

安堵を感じ眠ってしまったのか、という2点の答えが見えてくる。主人公が本当に殺したかった相手というのは、実は彼の妻だったのではないだろうか。だからこそ、妻殺しを成し遂げた主人公はもう猫を追わず、そして妻を殺したという達成感から安堵を感じて眠ってしまったのではないだろうか。そうだとすると、2匹目の猫を殺そうとした理由は、妻を殺さないために、身代わりとして必要だったからだといえるのだ。

一方、1匹目の猫であるPlutoはどうだろうか。2匹目の猫と同様に、Plutoも妻殺しを避ける身代わりだと考えれば、妻殺しの身代わりである黒猫を殺してしまったから、妻殺しを避けるため、2匹目の猫が必要になったといえるのである。

第2章

それでは、この妻殺しの物語は、一体何を表現しているのだろうか。主人公の暴力の発端について詳しく検討してみよう。

Plutoとの友情が、数年間続いたとした上で、主人公は性格が一変した理由を次のように述べている。

Our friendship lasted, in this manner, for several years, during which my general temperament and character — though the instrumentality of the Fiend Intemperance — had (I blush to confess it) experienced a radical alternation for the worse. (649)

彼の性格が一変した理由は、“Fiend Intemperance” つまり、酒が原因だった。そして、具体的な酒の名前が彼の狂気のピークにかかわる場面で登場する。

主人公がPlutoの目をえぐった場面に次のような記述がある。

My original soul seemed, at once, to take its flight from my body; and more than fiendish malevolence, gin-nurtured, thrilled every fibre of my frame. I took from my waistcoat pocket a penknife, open it, grasped the poor beast by the throat, and deliberately cut one of its eyes from the socket! (649)

“gin-nurtured”とあるように、彼はジンにあおられて、Plutoの目をえぐった。さらに、ジンは2匹目の猫と出会う場面でも登場する。

One night as I sat, half stupefied, in a den of more than infancy, my attention was suddenly drawn to some black object, responding upon the head of one of the immense hogsheads of gin, or of rum, which constituted the chief furniture of the apartment. (652)

ジンはこれらの場面で登場するのだが、この2つの場面は主人公の狂気にかかわる重要な場面なのである。何故重要なのかというと、Plutoの片目をえぐった後に、その猫を殺すという行動をとることは、1つめの狂気のピークである。さらに、2匹目の黒猫の登場は、妻を殺すことにつながっていくことを考えると、これは狂気の第2のピークにかかわることだからだ。このように、ジンには狂気にかかわる作用があるといえる。

さらにこの物語の中には、もう1つの酒、ワインが登場する。Plutoの片目をえぐった翌日のことだ。

I again plunged into excess, and soon drowned in wine all memory of the deed.
(650)

ここにあるように、ワインは主人公の気を鎮めるといった作用を持たされている。それでは、何故主人公の狂気のピークにかかわる場面で、ジンが登場するのだろうか。また、何故ワインが登場するのだろうか。

*The Black Cat*の時代においての、ジンとワインについて見ていこう。18世紀の終わりから、19世紀初頭の世紀転換期に、蒸留酒の原料となる穀物が大量に生産される。当時は交通機関が未発達であったため、生産者は大量に生産された穀物を品質が悪化する前に運搬する必要があった。そのまま運搬するよりも大量に運搬できたため、それらの穀物から蒸留酒を作り、大量の蒸留酒を流通させた。そのため蒸留酒の値段は安価なものになった。したがって、主に下層の人々が中心となって蒸留酒を飲んでいたのだ。

一方で、植民地時代から19世紀まで、ほとんどのワインは輸入に頼っていた。関税がかけられていたために高価だったワインは、一部の裕福な人間と、宗教的儀式に必要なために、聖職者たちだけが飲むことの出来る贅沢品であった。ワインに比べ、アップルサイダー、ピーチーなどの醸造酒やジンは非常に安価なものだった。特にジンは、下層民が飲んでいたので、一般にはあまり好まれてはいなかった。このように、ワインは裕福な人々が飲むものであり、ジンは下層の人々を中心に飲まれていたのである。¹

第3章

それでは、*The Black Cat*の主人公の地位はどのようなものだったのだろうか。まず、主人公は、次の理由で裕福な地位にいたといえる。彼はワインを飲むことの出来る立場だった。主人公はPlutoの片目をえぐった直後にワインを飲んでいる。一部の人間しか飲めなかったということを考えると、ワインを飲むことが出来るという理由でも、主人公は裕福な地位に属しているといえるのだ。ところが彼は、下層民を中心に飲まれていたジンを飲んで凶行に及んだとされている。他にも、主人公の地位を示唆するものがある。Plutoを殺害した後に、主人公の家が火事になり、逃げる場面に次のような記述がある。

It was with great difficulty that my wife, a servant, and my self, made our escape from the conflagration. (650—651)

主人公は“a servant”を所有していた。*OED*によると、“servant”の項目には、“In the North American colonies in the 17—18th c., and subsequently in the United States, servant was the usual designation for a slave.”とあるように、この“servant”はslaveの別の呼び方であると考えられると、次のように考えられる。1850年の時点で、南部白人の5.6%しか奴隷を所有してはいなかった。そして1から4人を所有していたのは、その内の半数だった。²つまり、*The Black Cat*の主人公は“a servant”というように1人を所有していたと考えられるため、その中の1人といえるのである。

しかしその一方で、主人公はPlutoの目をえぐるという行為に及んでいた。19世紀南部では、決闘が盛んに行われていた。上流階級の人間にとって決闘とは厳粛なゲームであったため、相手に致命傷を負

わせたり、死に追いやったりということは滅多になかった。他方、貧民層の人々は荒々しく決闘を行っていた。まさにルール無用であり、19世紀初頭においては、船乗り、狩人、山奥にいる農民たちの間の決闘では、かなりの残忍さが見られる。敗者の性器を切り取ったり、片目をえぐったりといった行為は決して珍しいものではなかった。したがって、Plutoの片目をえぐるという主人公の行為は下層民的な行為なのである。³

このように、*The Black Cat*の主人公には、社会的階層の上と下という、正反対の特徴が現れているのだ。

酒という観点から、主人公の地位に対する姿勢を見ることができる。下層民的なジンを飲むことで気弱な彼が下品になり、目をえぐるという荒々しい行動をとることができ、妻に暴言を吐き、妻やペットたちに暴力を振るったのではないだろうか。つまり、彼は荒々しさを得るためにジンを飲んでいたのである。さらに、その荒々しさからもとの上流に戻るためにワインを飲んで、今度は気を落ち着かせたのではないだろうか。このことから、彼は社会的階層の差を意識していたのではないかと考えられる。

結 論

このような枠組みで考えると、主人公が妻を殺す動機とは一体何なのだろうか。彼は物語の中の一連の出来事を、次のように語っている。

My immediate purpose is to place before the world, plainly, succinctly, and without comment, a series of mere household events. (648)

“a series of mere household events”とあるように、単なる家庭内の出来事だというのだ。妻との問題がこの物語の核心にあったのである。

それでは、妻と主人公との関係はどのようなものだったのだろうか。結婚前からの主人公の性格は、幼い頃から従順でいたわりのある性格であり、それが原因で周囲にからかわれていたと述べられている。

For my infancy, I was noted for the docility and humanity of my disposition. My tenderness of heart was even so conspicuous as to make me the jest of my companions. (648)

彼は周囲から、からかいの的になって、孤独であったと推測できるのだ。以下の引用に、

I was especially fond of animals, and was indulged by my parents with a great variety of pets. (648)

とあるが、両親はそんな孤独な彼を見て、様々なペットを買い与えたのではないだろうか。彼の家が裕福であったことを考えると、これが可能だと考えられる。そして、彼は大人になるまでペットに囲まれた生活を送る。

With these [pets] I spent most of my time, and never was so happy as when feeding and caressing them. This peculiarity of character grew with my growth, and, in

my manhood, I derived from it one of my principal sources of pleasure. (648)

主人公がペットを好きな理由は次の引用にある。

There is something in the unselfish and self-sacrificing love of a brute, which goes directly to the heart of him who has frequent occasion to test the paltry friendship and gossamer fidelity of mere Man. (648)

“the unselfish and self-sacrificing love of a brute”とあるように、彼は自分の言うことをよく聞いてくれるからペットが好きだったといえるのだ。このように、主人公は幼い頃から自分の言うことをよく聞くペットたちに囲まれて大人になるのである。そして、彼は若くして結婚し、様々なペットを飼うことになった。

I married early, and was happy to find in my wife a disposition not uncongenial with my own. Observing my partiality for domestic pets, she lost no opportunity of procuring those of the most agreeable kind. (648—649)

しかし、彼がからかいの的であって、幼い頃から孤独であったのではないかという点を考えると、自分でプロポーズして結婚したとは考えにくい。一方、孤独な主人公を見て様々なペットを買い与えた裕福な両親であったということを考えれば、妻との結婚は、両親が用意したものであり、両親がペット同様に、彼にあてがったものではないかと推測できるのである。つまり、主人公にとって、両親からあてがわれた妻はペットのような存在であったといえるのだ。次の引用は最後に妻を殺す前の部分である。

The moodiness of my usual temper increased to hatred of all things and of all mankind; while from the sudden, frequent, and ungovernable outbursts of a fury to which I now blindly abandoned myself, my uncomplaining wife, alas, was the most usual and the most patient of sufferers. (654)

このように、妻は彼の暴力に不平を言わなかったのだ。このことから、妻は主人公に従順であり、ペットと妻は一緒くりにすることができる。

それではなぜ、このように従順であった妻を殺す必要があるのだろうか。妻は次のようなことを口にしていた。

In speaking of his [Pluto's] intelligence, my wife, who at heart was not a little tinctured with superstition, made frequent allusion to the ancient popular notion, which regarded all black cats as witches in disguise. (649)

ここで、妻は1匹目の猫であるPlutoの賢さが話題になるとき、黒猫は魔女の化身だというのだ。主人公にとって従順なペットが魔女である、と妻は言ったのだ。ペットと一緒くりにされている妻もまた、魔女になる可能性があるかもしれないと彼は思ったのではないだろうか。つまり、従順であるはずのものが、いつまでもそうではないという思いに主人公は脅かされたのではないかと推測できるのだ。

しかし、いくら魔女の化身であっても猫は猫である。彼を脅かしたとすれば、その黒猫は魔女であると口にした妻である。社会的階層を意識していた主人公は、妻の地位が従順なものに収まらないという不安を感じたために、彼女に対し殺意を持ったと考えられるのだ。

この背景には、19世紀前半における女性の地位の変化が挙げられる。1830年代には女性に対する教育の普及が行われた。1834年には、オハイオ州で初めての男女共学の大学が発足し、また、1836年にはマサチューセッツに男子の大学に近い水準の女子専門学校が設立された。さらに、1848年にセネカ・フォールズで婦人運動の大会が開かれた。1830年代、40年代は女性の地位が向上し始めた時期なのである？

The Black Cat にはこのような背景が表れているのではないか。主人公の妻殺しという行為は、自らの地位が脅かされることで、社会的階層のバランスが崩れることに対しての、反動的な姿勢の表れだといえるのだ。

Notes

1. アメリカにおけるジンとワインの位置づけについては、岡本勝：『アメリカ禁酒運動の軌跡』を参照した。
2. 1850年のアメリカにおける奴隷所有者の割合については、有賀貞編：『アメリカ史1』を参照した。
3. アメリカにおける決闘については、Larkin, Jack: *The Reshaping of Everyday Life 1790-1840* を参照した。
4. 1840年代の女権運動については、中屋健一：『新米国史』を参照した。

Works Cited

『アメリカ史1』 有賀貞編 山川出版社、1994年。

Larkin, Jack. *The Reshaping of Everyday Life 1790—1840*. Harpercollins, 1989.

中屋健一。『新米国史』。誠文堂新光社、1988年。

岡本勝。『アメリカ禁酒運動の軌跡』。ミネルヴァ書房、1994年

Poe, Edgar Allan. *The Complete Stories*. Alfred A. Knopf, Inc, 1992